2022年の『ユリシーズ』―スティーヴンズの読書会
第14回 太陽神の牛（第14挿話） 2021年10月24日（日）@オンライン

13:30~13:40　ご挨拶
13:40~15:00　第1部　主催者発表
　　第14挿話あらすじ（小林）
　　第14挿話の難解な文体について（南谷）
　　「牛を追う」（南谷）＋「藁を拾う」（フロアアクティビティ）
15:00~15:10　休憩
15:10~16:05　第2部　参加者発表＋ブレイクアウトルーム＋ディスカッション
16:05~16:20　休憩
16:20~17:30　第3部　フロアディスカッション＋テーマパネル作成
17:40~19:30　懇親会

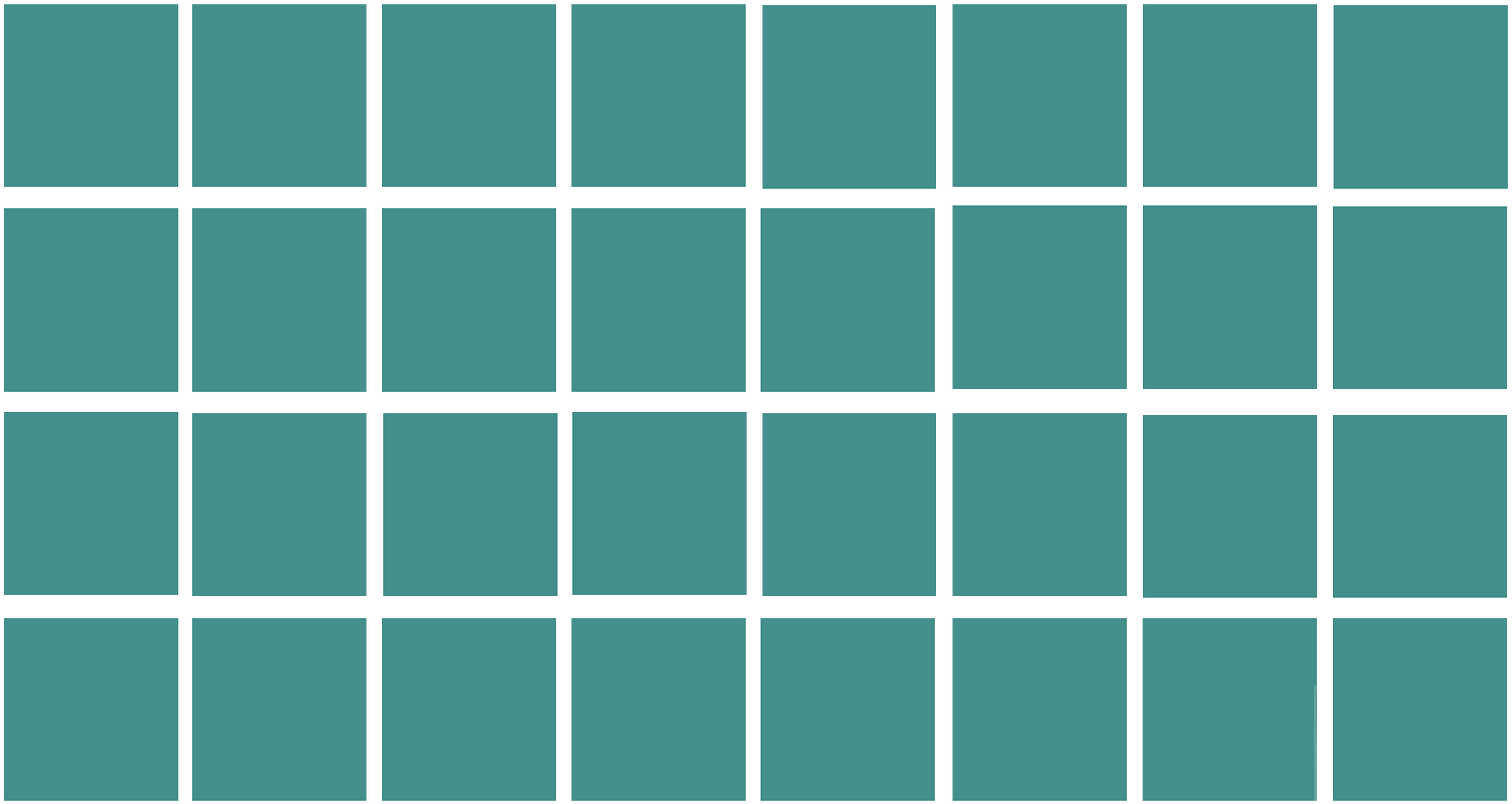
※スライド中では丸谷才一他『ユリシーズ』（集英社）を引用するにあたっては、「U-Δ 挿話番号.ページ数」と、柳瀬訳（河出書房）を引用する場合には、「U-Y挿話番号.ページ数」で表記します。

2022年の『ユリシーズ』ースティーヴンズの読書会 スケジュール

第1回 2019年6月16日	第4挿話　カリュプソー	Book II. Odyssey	initial style
第2回 2019年8月25日	第1挿話　テレマコス	Book I. Telemachia	initial style
第3回 2019年10月20日	第2挿話　ネストール	Book I. Telemachia	initial style
第4回 2019年12月22日	第3挿話　プロテウス	Book I. Telemachia	initial style
第5回 2020年2月9日	第5挿話　食蓮人たち	Book II. Odyssey	initial style
特別回 2020年4月26日	特別回　第1挿話〜第5挿話	Book II. Odyssey	initial style
第6回 2020年6月28日	第6挿話　ハデス	Book II. Odyssey	initial style
第7回 2020年8月23日	第7挿話　アイオロス	Book II. Odyssey	initial style
第8回 2020年10月25日	第8挿話　ライストリュゴネス族	Book II. Odyssey	initial style
第9回 2020年12月6日	第9挿話　スキュレとカリュブディス	Book II. Odyssey	initial style
第10回 2021年2月21日	第10挿話　さまよう岩々	Book II. Odyssey	initial style
第11回 2021年4月25日	第11挿話　セイレーン	Book II. Odyssey	
第12回 2021年6月27日	第12挿話　キュクロプス	Book II. Odyssey	
第13回 2021年8月22日	第13挿話　ナウシカア	Book II. Odyssey	
第14回 2021年10月24日	第14挿話　太陽神の牛	Book II. Odyssey	
第15回 2021年12月26日	第15挿話　キルケ	Book III. Nostos	
第16回 2022年2月	第16挿話　エウマイオス	Book III. Nostos	
第17回 2022年4月	第17挿話　イタケ	Book III. Nostos	
第18回 2022年6月16日	第18挿話　ペネロペイア	Book III. Nostos	

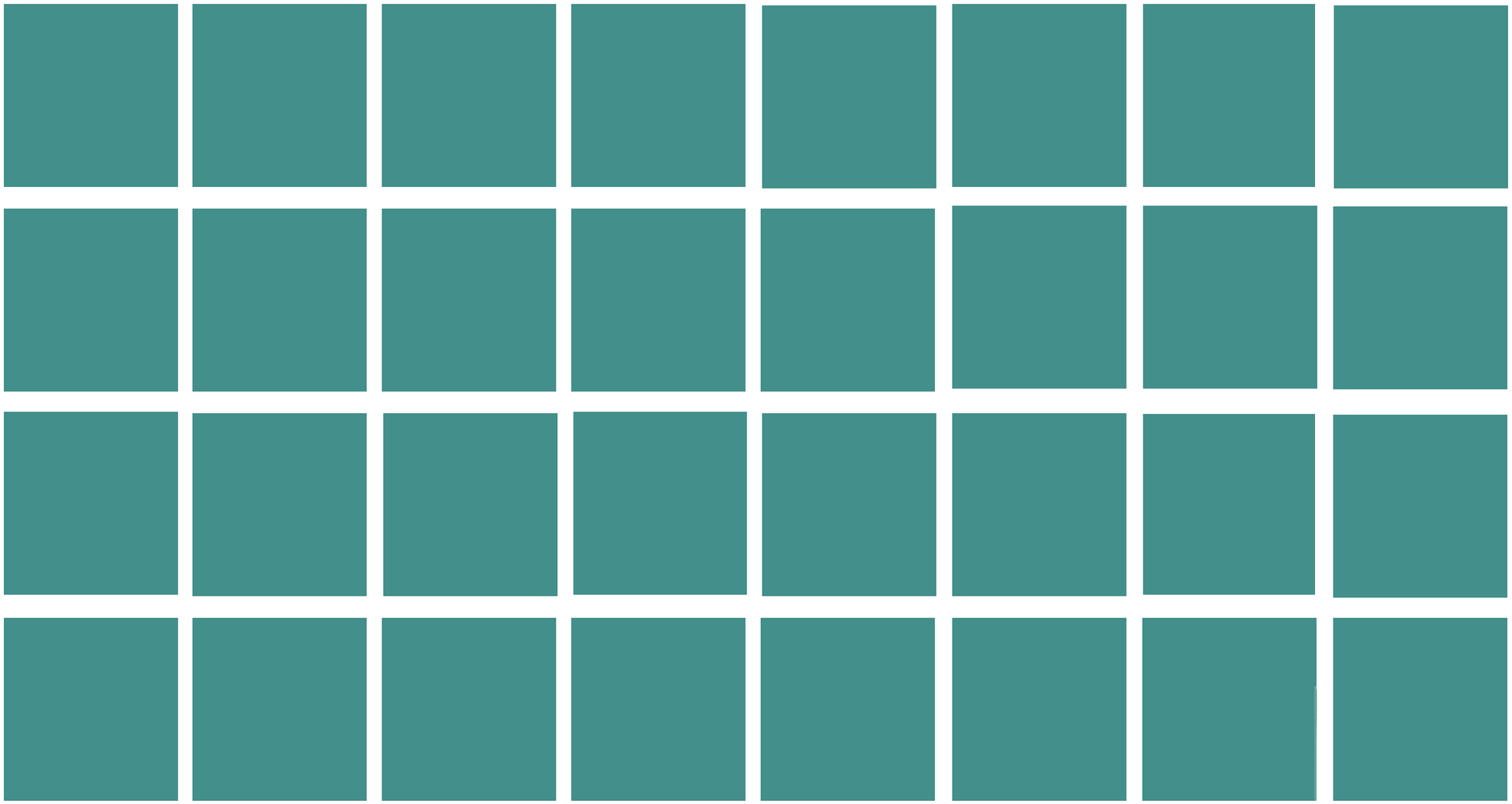
STEPHENS WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies

Episode 1: Telemachus



“ふんぞり返って、ふくらかなバック・マリガンが階段のてっぺんへ現れた。捧げ持つ石鹸の泡立つ丸い器にのせて、手鏡とカミソリが十文字に...”
（U-Y 1. 11）

Episode 2: Nestor



“ーさあ、コクラン、なんという市が遣いを送った？” “ータレントゥムです。”
“よろしい。それで？” “ー戦争になりました。” “よろしい。どこで？”（U-Y 2. 49）

Episode 3: Proteus

海	波	砂	貝	風	浜	潮	浜
馬	犬	女	男	馬	鴎	鳩	神
目	耳	靴	足	口	歯	臍	洟
死	産	詩	韻	巴	触	汚	溺

“可視態の不可避の様式。少なくともそれ、それ以上ではないにしても、おれの目を通しての思考。万物の署名をおれはここで読み取る”（U-Y 3. 73）

Episode 4: Calypso

猫	肉	食	臓	糞	便	紙	読
牛	乳	血	環	尻	肥	秘	隠
朝	鐘	金	猶	緩	庭	夫	妻
陽	絵	会	魂	出	鍵	失	閨

“リアポウルド・ブルーム氏は禽獣の臓物をうまがる男である。どろっとしたもつがらスープもいいし、こりこりする砂肝、詰め物をして焼いた心臓....”（U-Y 1. 11）

Episode 5: Lotus Eaters

郵	喪	花	茶	東	屍	温	浮
酔	香	水	植	歩	帽	光	沈
紙	聖	性	馬	猫	薬	歌	浴
式	棒	車	喫	煙	石	賭	体

“荷台車の連なるサー・ジョン・ロジャースン船寄せ通りをブルーム氏は粛々と歩いた。ウィンドウミル小路を過ぎ、リークス亜麻仁加工所、郵便電報局を過ぎる…”（U-Y 5. 127）

Episode 6: Hades

肉	血	骨	土	体	臓	心	爪
牛	馬	蹄	犬	鼠	蛆	花	草
屠	回	揺	埋	腐	解	交	流
列	噂	車	父	食	黒	帽	雨

“マーティン・カニンガムが、まず先に、シルクハットの頭をギッーと軋む馬車の中へ差し入れ、するりと乗り込んで席におさまった…”（U-Y 6. 155）

Episode 7: Aeolus

風	機	音	輪	山	詩	煙	教
電	話	止	転	塔	種	弁	学
肺	騒	馬	車	回	鍵	逆	空
心	血	鉄	樽	像	交	字	?

“ネルソン記念柱の前で路面電車は徐行し、待避線に入り、トロリーポールの移動をすませ、そうして発車する。ブラックロック、キングズタウン、ドーキー行き…”（*U*-Y 7. 203）

Episode 8: Lestrygonians

食	吐	歯	臭	鼻	業	環	水
視	盲	口	痛	血	蝿	輪	流
飢	鴎	疫	牛	肉	交	唇	穴
触	臓	汚	屠	骨	想	時	門

“パイナップル氷砂糖、レモン棒飴、バター飴玉。粗目糖顔の娘がクリスチャン・ブラザーズの男にせっせとクリームボンボンを掬っている。小学校のお楽しみ会だろか。ぽんぽんによくないよ。…”（U-Y 8. 261）

Episode 9: Scylla and Charybdis

門	談	光	魂	震	鷹	墜	巴
間	論	神	知	霊	梟	S	己
聞	語	幕	戯	劇	父	子	牛
問	説	床	翁	狂	讐	志	遺

“慇懃に、場を和めるべく、篤震の図書館長が喉ふるわせた。
ーそれにウィルヘルム・マイスターのあの貴重な一節もあるわけだから。偉大な詩人が偉大な同胞詩人を論じている。逡巡する魂が、葛藤する疑念に引裂かれつつ、苦難の海に立ち向かう。”（U-Y 9. 315）

Episode 10: Wandering Rocks

督	行	合	輪	馬	銭	刻	父
列	多	対	回	鳥	弧	落	交
門	路	像	橋	潟	窓	泥	海
扉	面	鏡	鍋	煮	乞	貧	貝

修道院長イエズス会士ジョン・コンミー師は、てかてかの懐中時計を内ポケットに戻しながら、司祭館の階段を下りた。三時五分前。アーテインまで歩いていくにはちょうどいい。ええ、あのこの名前は何といった？　ディグナム。そう。真にふさわしく義しきかな。

（*U*-Y 10. 373）

Episode 11: Siren

歌	音	色	金	銅	馬	人	食
杖	叉	鍵	聾	禿	鱈	魚	酒
調	鳴	唱	奏	笑	揺	聴	煙
海	潮	波	漣	貝	鈴	耳	屁

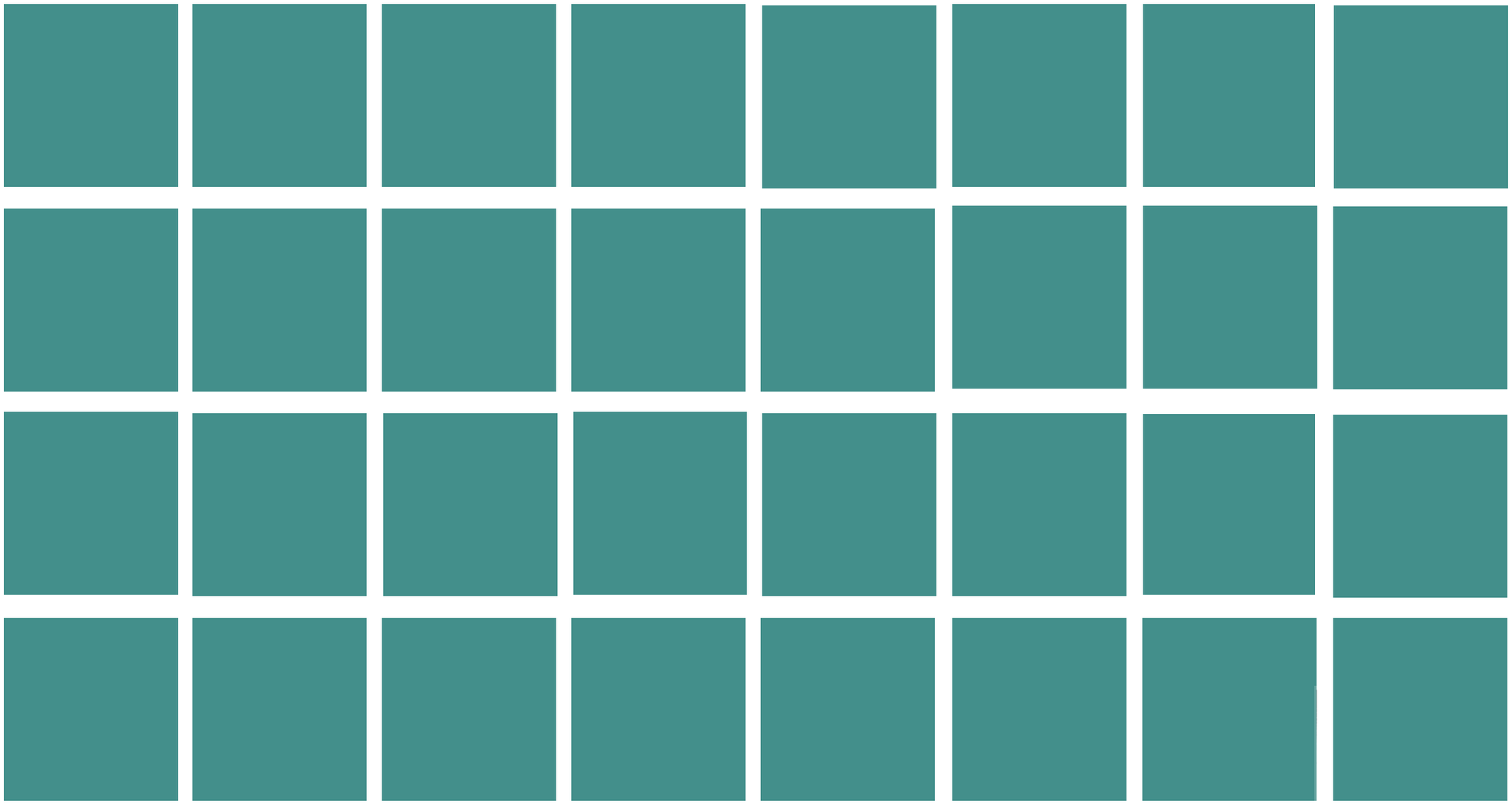
青銅と金の連が蹄を聞いた、鋼鳴りを。
こなまこしゃくしゃくしゃくしゃ
ふぁらら、ごつい親指爪からつまんで剥がしてふぁらら、ふぁらら。（*U*-Y 11. 433）

Episode 12: Cyclops

I	目	棹	酒	我	俺	通	発
一	眼	棒	憎	戦	畜	獣	犬
＋	愛	火	猶	死	生	追	伝
磔	罰	列	人	名	霊	群	云

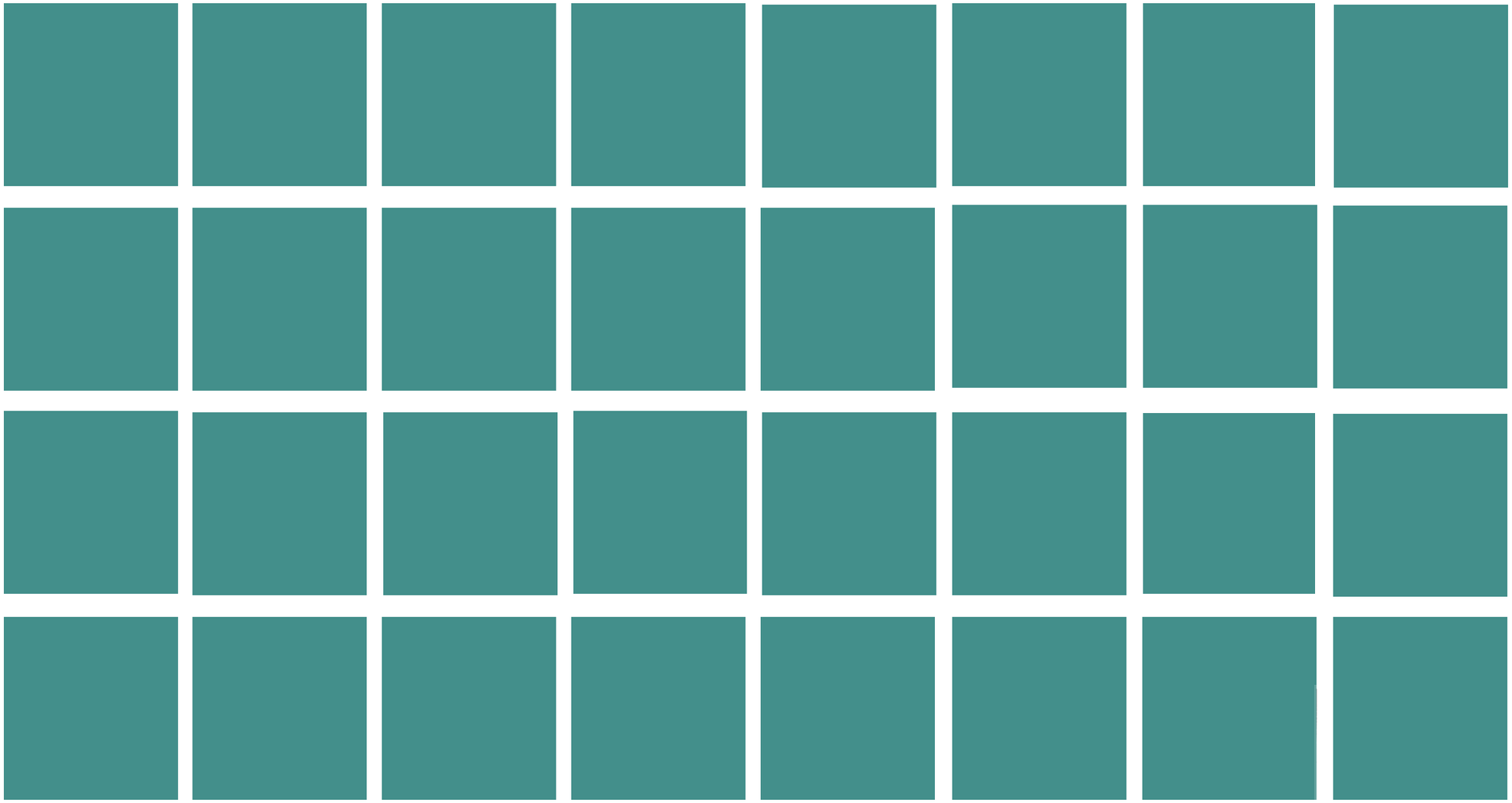
ダブリン市警のトロイ爺公とアーバー坂の角んとこでちょいと立話をしていたら畜生ッ煙突掃除め通りすがりに危うく俺の目ん玉へ道具を突っ込みそうにしやがった。
（*U*-Y 12. 497）

Episode 13: Nausicaa



夏の夕暮れはその神秘な腕に世界を抱擁しはじめていました。遥か西のかたに太陽は傾き、つかの間にうつろいゆく一日の名ごりの夕映えが立ち去りかねて、いとおしげに残照を投げかけています。（*U*-Δ 13. 497）

Episode 14:Oxen of the Sun



南行保里為佐。南行保里為佐。南行保里為佐。
いざ賜へ、光の神、日の神、角々先生様、胎動所管と胎の実を。いざ賜へ、光の神、日の神、角々先生様、胎動所管と胎の実を。（U-Δ 14.13）

第14回読書会　参加者からの提供資料

（1）第14挿話に関する考察（主代さん）

（2）第14挿話を最初のほうだけ現代文にしてみた(仮)

（yoshinoさん）

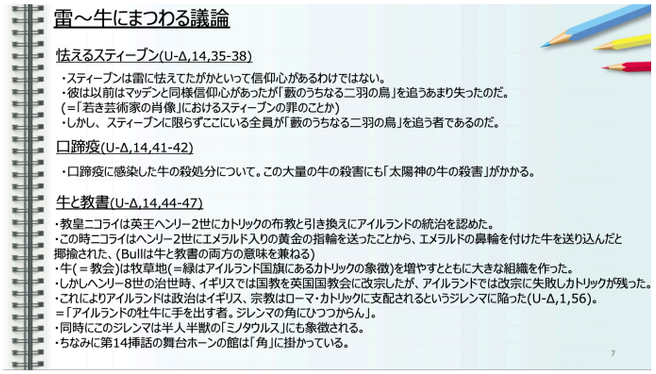
（3）第14挿話太陽神の牛 エロと言文不一致運動について

（三月うさぎ（兄）さん）

（4）第14挿話太陽神の牛 それはいったい誰なのか編

（三月うさぎ（兄）さん）

※いずれの資料もホームページにStephen’s Notesに掲載してあります。ぜひ予習・復習用にお役立てください。https://www.stephens-workshop.com/stephens-s-notes/



雷～牛にまつわる議論

怯えるスティーブン(U-Δ,14,35-38)

・スティーブンは雷に怯えてたがかといって信仰心があるわけではない。
・彼は以前はマッデンと同様信仰心があったが「藪のうちなる二羽の鳥」を追うあまり失ったのだ。
（＝「若き芸術家の肖像」におけるスティーブンの罪のことか）
・しかし、スティーブンに限らずここにいる全員が「藪のうちなる二羽の鳥」を追う者であるのだ。

口蹄疫(U-Δ,14,41-42)

・口蹄疫に感染した牛の殺処分について。この大量の牛の殺害にも「太陽神の牛の殺害」がかかる。

牛と教書(U-Δ,14,44-47)

・教皇ニコライは英王ヘンリー2世にカトリックの布教と引き換えにアイルランドの統治を認めた。
・この時ニコライはヘンリー2世にエメラルド入りの黄金の指輪を送ったことから、エメラルドの鼻輪を付けた牛を送り込んだと揶揄された、(Bullは牛と教書の両方の意味を兼ねる)
・牛(＝教会)は牧草地(＝緑はアイルランド国旗にあるカトリックの象徴)を増やすとともに大きな組織を作った。
・しかしヘンリー8世の治世時、イギリスでは国教を英国国教会に改宗したが、アイルランドでは改宗に失敗しカトリックが残った。
・これによりアイルランドは政治はイギリス、宗教はローマ・カトリックに支配されるというジレンマに陥った(U-Δ,1,56)。
＝「アイルランドの牡牛に手を出す者。ジレンマの角にひつつかられ」。
・同時にこのジレンマは半人半獣の「ミノタウルス」にも象徴される。
・ちなみに第14挿話の舞台ホーンの館は「角」に掛かっている。

Ball'n'Chain

雑記

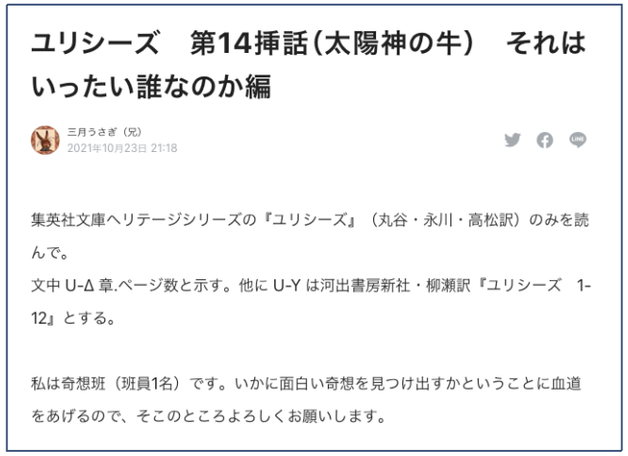
2021-10-06

読めぬなら　訳してしまえ　ep.14

2022年の『ユリシーズ』―スティーヴンズの読書会
予約開始日：2021年9月25日（土）12:00～ 開催日：2021年10月24日（日）13:30～17:30 開催場所：Zoomによるオンライン読書会 参加費：無料 定員：先着50名 テキスト：丸谷才一・永川玲二・高松雄一訳『...
www.stephens-workshop.com 1 user

www.stephens-workshop.com

第14挿話の鼎訳と原文を突き合わせて、「大体こんなことを言ってますよ」と思われる部分をあらすじ的にまとめてみようと思ったのですが、いつものようにざっくりまとめることができず、かなり訳し直しのようになってしまいました…　ほんの途中までです。また増えるかもしれませんが。



ユリシーズ　第14挿話（太陽神の牛）　それはいったい誰なのか編

三月うさぎ（兄）
2021年10月23日 21:18

集英社文庫ヘリテージシリーズの『ユリシーズ』（丸谷・永川・高松訳）のみを読んで。
文中 U-Δ 章.ページ数と示す。他に U-Y は河出書房新社・柳瀬訳『ユリシーズ　1-12』とする。

私は奇想班（班員1名）です。いかに面白い奇想を見つけ出すかということに血道をあげるので、そこのところよろしくお願いします。

第14挿話「太陽神の牛」の圧倒的な難しさについて

第14挿話「太陽神の牛」の圧倒的な難しさについて

- I am working now on the *Oxen of the Sun* the most difficult episode in an odyssey, I think both to interpret and to execute . . . . (Letter from Joyce to Harriet Shaw Weaver, Feb. 25, 1920, *Letters I*, p. 138)

- Those readers trying to follow 'the story' are inevitably frustrated, but this is exactly the point of the episode. (Katie Wales, *The Language of James Joyce*, Macmillan, 1992, p.129)

- 'Oxen of the Sun' is by general agreement the most difficult episode of *Ulysses*." ; "The crucial difference here is that it is no longer possible to separate out what is being told from the telling . . . The 'story' has disappeared almost completely behind a screen far denser than any put up so far. It is, in fact, still going on, but is almost invisible." (Terence Killeen, *Ulysses Unbound*, Wordwell, 2004, pp. 166-17)

第14挿話「太陽神の牛」の圧倒的な難しさについて

- After the strange but rousing incantation that frames the entry to *Oxen of the Sun*, these two mind-choking sentences clog the entrance, threatening to bar the reader's progress beyond the first page. Their thought, though, does not seem highly complex. Impatient readers can pluck some kernels of meaning from the **whirling linguistic chaff** and move on, while those with more interest in how words are strung together to make syntactic structures can derive some pleasure, or at least mental exercise, from trying to piece together the architecture of disjointed clauses, long parenthetical phrases, and bafflingly arranged modifiers, perhaps even admiring the perverse ingenuity by which Joyce has twisted English into a semblance of a highly inflected language. (John Hunt, "That Person's Acumen", *The Joyce Project,* http://m.joyceproject.com/notes/140033universally.html, 2014)

第14挿話「太陽神の牛」の圧倒的な難しさについて

Universally that person's acumen is esteemed very little perceptive concerning whatsoever matters are being held as most profitably by mortals with sapience endowed to be studied who is ignorant of that which the most in doctrine erudite and certainly by reason of that in them high mind's ornament deserving of veneration constantly maintain when by general consent they affirm that other circumstances being equal by no exterior splendour is the prosperity of a nation more efficaciously asserted than by the measure of how far forward may have progressed the tribute of its solicitude for that proliferent continuance which of evils the original if it be absent when fortunately present constitutes the certain sign of omnipollent nature's incorrupted benefaction.

- …This appalling sentence read like the literal translation of a tract on 'child welfare' written in Latin by a demented German Docent. (Stuart Gilbert, *James Joyce's* Ulysses, Faber and Faber, 1930, p. 292)

ラテン語模倣文体パート（U14.7-17）の要約

Universally that person’s acumen is esteemed very little perceptive concerning whatsoever matters
蓋し国運勢数を論ぜんにもし夫れ繁殖の継続なかりせばこれ諸悪の根源にして幸運にも

are being held as most profitably by mortals with sapience endowed to be studied who is ignorant
存すれば彊力なる自然の施す十全なる善行の確然たる表徴と言ひ得べけれど一国民の

of that which the most in doctrine erudite and certainly by reason of that in them high mind’s
栄映を外見の光華によつて量度せんと欲する者は他の諸条件悉しき場合に於ては繁殖の

ornament deserving of veneration constantly maintain when by general consent they affirm that
継続に対する配慮の証しいかばかり進歩発展しありやを料計するを以て最も明快なる

other circumstances being equal by no exterior splendour is the prosperity of a nation more
方途となすことは学理に関しては達識にして英邁なる精神に於ける彩飾とも謂ふべき

efficaciously asserted than by the measure of how far forward may have progressed the tribute of
この博学ゆゑ畏敬に値する人士の皆一致して認むるところなるに彼等の至当と判定する

its solicitude for that proliferent continuance which of evils the original if it be absent when
百事に無知なる徒輩の凡智は知恵に富む人類の学んで裨益する所多大なりと思はるる

fortunately present constitutes the certain sign of omnipollent nature’s incorrupted benefaction.
万般に関して甚大なる認識の不備ありと世人の判断するも亦宜なる哉。

(*U*14.7-17；*U*-Δ14. 13-14)

ラテン語模倣文体パート（U14.7-17）の要約

Universally that person's acumen **is** esteemed very little perceptive <concerning
予告のthat=who以下を受ける；who以下のような人々の洞察力は明敏とはとても言えない

whatsoever matters **are** being held as most profitably <by mortals with sapience
profitably: 副詞になっている理由は不明

<endowed to be studied>>> [who is ignorant of that which the most in doctrine
=以下venerationまでの名詞節で、ofの目的語

erudite and certainly by reason of that in them high mind's ornament <deserving of

veneration>] constantly **maintain** when <by general consent> they **affirm** [that <other
主語はthe most erudite　　=the most erudite

circumstances being equal> by no exterior splendour **is** the prosperity of a nation
倒置(1）→

more efficaciously asserted than by the measure of [how far forward may **have**
倒置（2）→

progressed the tribute of its solicitude for that proliferent continuance] which of
tribute: "material evidence or a formal attestation"　　予告のthat=which以下を受ける

evils the original <if it be absent> <when fortunately present> **constitutes** the certain
本来の語順はwhich constitutes the original of evils

sign of omnipollent nature's incorrupted benefaction.] (U14.7-17)
≒omnipotent＋pollen

ラテン語模倣文体パート（U14.7-17）の要約

【要約】知的に優れた人々が、「ある民族の繁栄はその民族が継続的な繁殖力に対する心配りをどれだけ見せているかを計ることでわかる」と口を揃えて言っているときに、そのことを知らないでいる人の洞察力は乏しいと言わざるを得ない=ある民族にとって繁殖は重要である＋自然により与えられている繁殖力を尊重せよ。

- 文の意味やメッセージを意図的に伝えないようにする文体の提示＝簡単に「意味」や「メッセージ」を産み出さない。
- なかなかピリオドに行き着かず、その複雑な文の迷路から出てこれないような窒息感、息苦しさを感じさせるための長さ（※第18挿話の内的独白とは対比的）
- その難解な文を読むときの遅々とした進行、苛立たしさ、疲れ、倦みが、ミセス・ピュアフォイの難産の苦痛をなぞる。意味ではなく、痛みを産む文。

→第14挿話の冒頭部分の難解さは、ページを読む読者に「読む身体」をつくらせ、それを意識させるように構成されている。読者をして疲れさせること、ため息をつかせること、イラつかせることがジョイスの狙い。
→ただし第14挿話は終始苦しいわけではない。その意味で文体模倣を優先した鼎訳は、ずっと読者を疲れさせ、イラつかせる時点で成功していない。

たった一語からはじまる落雷と奔流

- "*Look at, Bloom. Do you see that straw? That's a straw*. Declare to my aunt he'd talk about it for an hour so he would and talk steady." (*U*12.894-96)

- Yet a chance word will call them[sins/evil memories] forth suddenly and they will rise up to confront him in the most various circumstances, a vision or a dream, or while timbrel and harp soothe his senses or amid the cool silver tranquility of the evening or at the feast, at midnight, when he is now filled with wine. Not to insult over him will the vision come as over one that lies under her wrath, not for vengeance to cut him off from the living but shrouded in the piteous vesture of the past, silent, remote, reproachful. (*U*14. 1348-55)

- But as before the lightning the serried stormclouds, heavy with preponderant excess of moisture, in swollen masses turgidly distended, compass earth and sky in one vast slumber, impending above parched field and drowsy oxen and blighted growth of shrub and verdure till in an instant a flash rives their centres and with the reverberation of the thunder the cloudburst pours its torrent, so and not otherwise was the transformation, violent and instantaneous, upon the utterance of the word.
  Burke's! (*U*14.1383-91)

『ユリシーズ』とたった一語からはじまる落雷と奔流

- 「…誓って言うが、そこらの汚ったねえ床に落ちてる藁1本を拾って、ブルームに言ってみな。おいブルーム、この藁が見えるか。これは藁だぞ、ってな。**俺の叔母さんに掛けて言うがな、あいつは1時間だってそれについて話すさ。のべつまくなしにな**。(*U* 12. 894-97)」

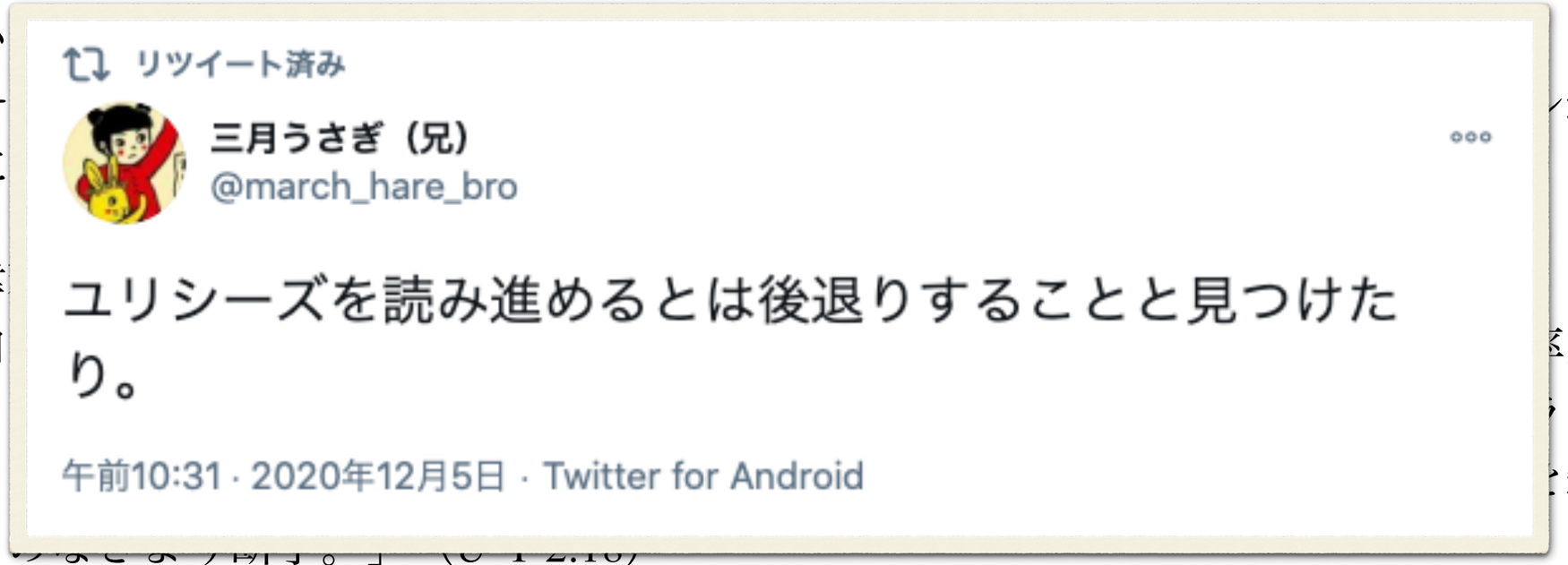
- **けれども偶然の言葉[a chance word]が突然それ等［「罪」や「悪の記憶」］を呼び出し、種々雑多なる場合において、すなわち幻覚に**、また夢に、または手鼓や竪琴が彼の五感を軟らげているときに、または夕暮れの涼しい銀色の静寂の中で、または彼が今や酒をたらふく飲んだところの真夜中の宴において、**それ等は立ち現われ、彼に迫って来る**。その幻は、それお怒りに触れて許しを乞う人間を侮辱するために現れるのではなく、また、彼を聖者から切り離して復習するために現れるのでもなく、過去という悲しい屍衣を着て、音もなく、遠くから、咎めるが如くに現われてくるものである。（『ユリシーズ』伊藤整訳, 104頁）

- けれども雷電の前に、密集した雨雲が過剰な湿気のために重くなり、膨張した塊となってもくもくと広がり、ひとつの巨大な眠りのなかに天と地をつなぎ、乾いた原野と眠たげな牛と枯れた灌木と緑の叢の上に垂れ下がり、やがて突如として閃光がその中心を打ち破り、雷鳴の轟きとともに驟雨が降り注ぐように、**正にそれと同じように、一語が叫ばれるとともに忽ち激烈な変貌が起こったのである。**
バークへ！（『ユリシーズ』伊藤整訳, 104頁；ただし一部訳を変更して引用）

牛を追う：「太陽神の牛」と口蹄疫

〔レネハ
〔ブルー　　ン通
ひの船に

→牛津
→「口　　逐。
牛疫。　　ッ
クウッ　　殺
すこと



ぼぎゅう
→新牝牛派詩人（*U*-Y 2.68）
→ハンロン牛乳店の牛乳とそれを舐める猫（*U*-Y 4.102-03）
→家畜市場に居た頃は、毎朝、囲いの中でモーモー啼く牛……（*U*-Y 4.108）
→烙印の押された牛の群れが二つに分かれて窓の両側を通って行く。…明日が屠畜の日。…たぶんリヴァプール行きだろう。（U-Y 6.172）
→「……口蹄疫？　きみは転身したのかい、その……？「新牝牛派詩人にです。」（*U*-Y 7.228）
→「ビフテキは食べない。食べようものならその牛の目が未来永劫つきまとう。」（*U*-Y 8.284）；「動物の苦痛ってこともある」（*U*-Y 8.291）

牛を追う：「太陽神の牛」と口蹄疫ー「ユリシーズにおける牛の病」（浅井学『ジョイスのからくり細工ー「ユリシーズ」と「フィネガンズ・ウェイク」の研究』あぽろん社, 2004年, pp. 114-50）

V 『ユリシーズ』における牛の病

どんな作品を論じる時にも、マイナーなトピックというものがある。ジョイスの『ユリシーズ』の中にも、もちろんそれはある。これから取り上げる牛の病気の話は、全く無視されてきたというわけではないにしても、正面きって取り上げられてきたトピックではない。とりわけ作品構造の中でどういう役目を担っているかについてはほとんど言及がない。そういう意味では、これもまたマイナーなトピックである。しかし、そのような話題に関しても、時に光を当ててやることは必要であろう。本章の目的は、『ユリシーズ』に出てくる口蹄疫（foot-and-mouth disease）のモチーフを今一度考え、それを通じてさらに見過ごされているテキストの細部に光を当てることである。

『ユリシーズ』の第二挿話「ネストール」は、スティーブン・ディーダラスが小学校の教師として働いている様子を描いている。教室で歴史の授業をした後、校長のディージー先生に呼ばれて校長室に行き、そこで給料をもらって、ある頼みごとをされる。その頼みごととは、スティー

ブンの持つ新聞社へのコネを利用して、今書いている手紙を投書として新聞に載せてほしいというものである。この手紙の内容が、牛の口蹄疫に関するもので、ディージー先生は、最近アイルランドで問題になっていたその病気の有効な治療法を耳にしたので、そのことを新聞を通じて訴えたい、というのである。[1]

話を進める前に口蹄疫というのがどのような病気か、念のため確認しておきたい。口蹄疫とは、反芻動物、特に牛がかかる悪性伝染病である。その特徴はジョイスが『ユリシーズ』を書いた頃の『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第十一版には次のように書かれている。

最初にまず熱が出、次いで舌、口蓋、唇、また時に畜牛の鼻孔、第四胃、腸の中に水泡が生じる。それから乳房や乳首、蹄間、蹄球、蹄冠、蹄とくるぶしとの間、といった皮膚の薄い身体の部位にもこの水泡ができる。本疫は突然に始まり、極めて急速に伝染し広がっていく。発熱の後に水泡が生じ、流涎と独特の口内吸啜音を伴う。水泡は徐々に肥大化し、最後にはそれが破れて爛斑となり激しく痛む。病畜は食欲が落ち、痛みと不自由に苦しみ、体調を崩す。乳を出す動物の場合は乳の出が悪くなり、妊娠している場合は流産することもある。多かれ少なかれ跛行がこの病気につきものの症状の一つであるが、時には足をあまりにひどく

牛を追う：「太陽神の牛」と口蹄疫ー「ユリシーズにおける牛の病」（浅井学『ジョイスのからくり細工ー「ユリシーズ」と「フィネガンズ・ウェイク」の研究』あぽろん社, 2004年, pp. 114-50）

やられて極度の歩行困難となり、屠殺せざるを得なくなることもある。病畜が幼い場合にはしばしば命を落とす。本疫は唾液や水泡からの分泌物によって媒介されるが、あらゆる分泌物や排出物が感染媒体となるのは疑いない。それらによって汚れた品物や場所もまた感染媒体となる。[2]

また、こうもある。

本疫はほとんどすべての家畜に伝染するが、もっとも猛威をふるうのは牛、羊、山羊、豚に対してである。ヒトにも感染する。

どうも想像するだにおぞましい感じがする病気である。

さて、『ユリシーズ』における口蹄疫のモチーフに関しては、まず、ハリー・ブラマイアーズのちょっとしたコメントがある。それは、口蹄疫の手紙に出てくるフレーズのいくつかが主人公ブルームと妻モリーの性的関係を表しているという意見の一部で、口蹄疫が夜二人の寝る時の格好に体現されているというものである。[3] 第十七挿話で明らかになるのだがブルーム夫妻は、同じ

ベッドでは寝るものの、そう言われて我々が想像するように夫婦仲睦まじく枕を並べて、というわけではない。二人は同じベッドで頭をそれぞれ逆の方に向けて、つまり頭の横下、というか肩の脇に相手の足がくるような向きで寝ているのである。つまり口と相手の足が対応するような向きで寝るわけである。ブラマイアーズが言いたいのは、これは二人の夫婦生活がうまくいっていないことを表していて（第十七挿話の語り手の言葉を信じれば二人の間に完全な性交渉はおよそ十年七カ月の長きにわたって無い（17.2278-84））、この病的な状態こそ foot-and-mouth disease だ、ということだろう。これは確かにおもしろい考え方で、頭から否定するつもりはない。しかし、口蹄疫のモチーフを考えるためには、なぜディージー先生によってこのモチーフが導入されるのかをまず考えてみなくてはいけないだろう。

そもそも、ここで出てくるディージー先生とはどのような人物なのか。彼に関しては、プロテスタントでユニオニストであり、目的論的歴史観を奉じていて、反ユダヤ的であることなど、色々言うべきことはあるのだが、ここではそれ以上に彼の特徴となっているある事柄に注目したい。スティーブンとの会話の途中で彼はこんなことを言う。

A woman brought sin into the world. For a woman who was no better than she should

牛を追う：「太陽神の牛」と口蹄疫

〔レネハン〕「流行り病のため。屠らる。ケリーの牛のこと。（U-Δ14.42）
〔ブルーム〕「なんと。牛はみな殺さるるにや。さはあらじ。この朝。リヴァプール通ひの船に。牛どもの乗るを見し。さほど由々しとは。信じがたき事哉」（*U*-Δ14.43）

→そしてその道を辿り行く群れ無、先導牡羊、繁殖季の牝羊、剪毛済の当歳牡羊、子羊、切株飼育の鵞鳥、波の去勢牡子牛、喉鳴牝馬（ひんば）、無角牛、毛長緬羊、カフ畜産特選孕み牛（経産牛）、劣等種、避妊雌豚、ベーコン用牡豚、及び諸々各種様々の極上種種豚、アンガス産牝牛、完全純血種角切り去勢牛、並びに共進会特賞の乳牛や肉牛。（U-Y12.501）

厚き雲作りなす大道を反乱の雷声つぶやきつゝ来る者は獣類の亡霊なり。フーフ！ハーク！　フーフ！視差は背後に忍び寄り、突き棒もて駆り立てるなり。その鋭き雷光はまさに蠍。大鹿に犂牛、バシャンとバビロンの雄牛（ブル）、「マンモス」に「マストドン」。彼らは沈没せる海、死海の方へと大挙襲ひ来る。復讐の心に燃えし不吉なる野獣の群れよ。呻き声あげ、雲を越えて到来す。短きまた長き角持つもの、長き鼻を持つもの、牙あるもの……..すべて移動し呻吟する大群、太陽をあやめる者ども。（U-Δ14.70-71）

第14挿話の読み方ー藁を拾う

- 口蹄疫はイングランド1839年に初めて発生、ストラットフォードからスミスフィールド市場に伝播、以降、ノーフォーク、デヴォン、スコットランド、アイルランドと、全国に拡散。牛だけでなく、羊、豚、家禽にも伝染。第二波が1845年、第三波が1849年にスコットランドで発生。1852年から漸減していくが、1861年に第４波が訪れ急速に拡大。第5波が1865年に発生。同年に家畜疫病委員会が組織され、ようやくその原因と治療・予防法の模索が始まる。

- 1869年に国会で感染伝染病指定。1871年にはアイルランドで病気が広がり、翌年からは漸減していくが、1873年には第７波発生、イングランド、スコットランド、アイルランドへと、全国に急速な勢いで広がる。（*Journal of the Bath and the West of England Society and Southern Countries Association for the Encouragement of Agricultures, Arts, Manufactures and Commerce*, vol. 7, 1875, pp. 98-110.）

- “It is important to notice that the gradual decrease in the number of attacks after a certain period of excessive prevalence of the disease, is a well-known fact in the history of epizootics, but one which is difficult of explanation.” (ibid, p.100.)

- 当時はウィルスとしてまだ単離されておらず、動物の皮や角、蹄、内臓が媒介する、また、空気感染も起こると考えられていた。ワクチン接種も試みられたが、奏功せず。全殺処分を命じる法令や移動の制限、罹患した動物の隔離、輸出入の停止によって対抗措置が取られた。（Arvel B. Ercikson, “The Cattle Plague in England, 1865-1867, Agricultural Historu, vol. 35, no. 2, Apr, 1961, pp. 94-103）

第14挿話の読み方ー藁を拾う

- 1871年にはアイルランドで病気が広がる。
- “Politics and Cattle Disease” (1912 *Freeman’s Journal* , *OCPW* 206-08) は、ジョイスによる著作ではないと現在考えられている。

→Terence Matthews, “An Emendation to the Joycean Canon: “The Last Hurrah for ‘Politics and Cattle Disease,’” *JJQ,* vol. 44, 2007, pp. 441-53.

2.321 the foot and mouth disease

アイルランドで口蹄疫が初めて発生したのは1912年なので、ディージーが口蹄疫に言及するのはアナクロニズムとなる。1912年にジョイスの友人Henry Blackwood Price（2.334参照）が下院議員William Field（2.415参照）宛に口蹄疫の治療法についての手紙を送っており、ディージーによる投稿はそのパロディである。ジョイスも口蹄疫に関心を抱き、1912年9月10日付けのフリーマンズ・ジャーナル紙に *Politics and Cattle Disease*（CW p.238）という評論を発表している。

北村 富治『ユリシーズ大全』慧文社, 2014, p80.

次回第15回読書会について

次回の第15回読書会（第15挿話：キルケー）は12月26（日）にオンラインで実施します。予約開始日はtwitter（@YMINAMITANI）とStephens Workshopのホームページでお知らせします。**ご登録の際は、携帯アドレスではなく、Webメールでのご登録をお願いいたします**。

後ほどアンケートフォームを別途送付しますので、今回のご感想・改善点について教えていただけると幸いです。

本日はご来場いただき、ありがとうございました。